様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　６ 日現在

機関番号：３２４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６９４

研究課題名（和文）言語使用と言語意識形成に関する理論と実証－アイルランド英語の文法変化を中心に

研究課題名（英文）Language Use and Socio-linguistic Awareness: An Investigation of Grammatical Changes in Irish English

研究代表者
嶋田　珠巳（Shimada, Tamami）

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０５６５３８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：文法形成、話者の言語意識と言語使用、言語接触の観点から、アイルランド英語研究の成果をまとめた。アイルランド南西部地域におけるこれまでの調査を『英語という選択－アイルランドの今』として公刊した。論文Speakers' awareness and the use of do be vs. be after in Hiberno-English(World Englishes 35)においては言語使用における言語意識の作用に関する仮説を提案した。言語接触の基礎論、話者とコミュニティをめぐる言語環境の関与性の基礎的な考察は『言語接触－英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』に論考がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義として、言語接触による文法形成の研究への貢献、さらに他の諸理論や事例研究との有機的関連のもとに、言語変化のメカニズムの解明に寄与することが期待できる。社会的意義として、共編著書『言語接触－英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』で一つの試みをおこなったように、今日的な意味合いをますます帯びている言語接触について一般の人たちと基礎的な理解を共有すること、本研究で得た知見を言語教育等に活かすことがある。

研究成果の概要（英文）：This project has addressed contact-induced grammar formation, the sociolinguistic awareness and language use of speakers, and language contact, drawing on the study of Hiberno-English/Irish English(HE).The central result is “Eigo toiu Sentaku: Ireland no Ima” (lit.The choice of the English language: Ireland today, Tokyo:Iwanami). My fieldwork in Southwest Ireland provided data to analyse the present status of various grammatical features and speakers’ awareness and attitudes. Other publicised works include the papers “Speakers' awareness and the use of do be vs. be after in Hiberno-English”(World Englishes 35, 2016) and''Tis… pattern in Hiberno-English as a grammatical innovation”(TULIP 39, 2018). The former investigates the interface of social and linguistic factors, providing theoretical perspectives on the role of speakers. The latter suggests that HE has inherited from Irish grammatical opposition for mapping information structure and has imposed it into English morphosyntax.

研究分野：言語学

キーワード：言語接触　言語意識　アイルランド英語　英語諸変種　文法　言語とアイデンティティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

アイルランドはおよそ 100 年前にアイルランド語から英語への言語交替を経験している。アイルランド語を話す人々の日常言語がシフトし、今日までにアイルランドの土地に根づいた言語がアイルランド英語 (Hiberno-English, HE)である。

HE の言語事実は基層のアイルランド語の影響を考えずには説明が難しい。語彙的、音韻的な特徴に HE の固有性がみられるだけでなく、テンス・アスペクトおよび情報構造の表現に関する文法的対立といった文法の根幹といえる部分に、標準英語ないし他の英語変種と区別可能な体系を見出すことができる。このような独自の体系は HE がアイルランド語母語話者の英語習得のうえに根づいた言語であることを考えれば当然のことであるが、現代の HE は他の主要な英語変種との、いわば「第二の接触」のなかでさらなる変化が起こっていることも着目される。フィールド調査においては、「第一の接触」によって形成され、新言語として文法的なイノベーションを含み持った HE の文法体系が、「第二の接触」をうけてさらに変化しつつあるさまが観察される。HE の語彙・文法諸形式に対する話者意識は‘Irishness’と‘Standard’の二つの指標に拠って表すことができる。研究開始までには、言語変化の方向性を話者の言語意識との関わりにおいて考察してきた。

２．研究の目的

本研究の目的はアイルランド英語(HE)の調査研究に基づいて、言語使用と言語意識の形成に関する理論を構築することである。HE はアイルランド語と英語の言語接触によって生じた言語であり他の英語変種には見られない形態統語的諸特徴をもつが、そのような特徴のなかには、現在廃れつつあるものがある一方で、現在もいきいきと話し言葉のなかに現れるものがある。本研究においては、言語意識をもつ主体である話者を媒体として言語変化が起こるという考えのもとに、ミクロな視点から分析を行い、言語意識がどのように言語使用に関わっているのかを検討する。

３．研究の方法

現地にてアイルランド英語(HE)話者の協力を得ながら行う言語調査および言語意識調査が中心である。研究全体を通して、現地調査によるデータと文献調査において浮かび上がる重要な論点等の相互検証をたえず行うことによって、言語現象と話者の言語意識に関する正確な分析と理論的考察を可能にする。文法体系に言語意識が及ぼす影響の考察にあたっては、HE の文法研究が土台になる。文法研究については、標準英語との対照によって描かれる文法特徴をもとに言語内部の文法的対立を明らかにする方法をとる。研究内容は、(1)アイルランド英語の動態的記述、(2)接触による言語変化および言語接触環境に関する調査と分析、(3)言語使用と言語意識形成の理論の検証から成る。

４．研究成果

(1) アイルランド英語の動態的記述

i. アイルランド英語をめぐる言語環境と言語的性質

文法形成、話者の言語意識と言語使用、言語接触の観点から、HE に関するこれまでの研究を『英語という選択––アイルランドの今』（岩波書店, 2016 年）にまとめ、公刊した。

ii. 文法特徴からのアプローチ

・HE の情報構造表現に関する分析と文法形成の考察は論文 “*’Tis*…. Pattern in Hiberno-English as a Grammatical Innovation”（『東京大学言語学論集　林徹先生記念論文集』, 第 39 号, 243-263 頁, 2018 年）にまとめた。分裂文とされてきた HE の *’tis (~it is)* ….文が標準英語の分裂文とは違った情報構造を持つこと、その文構成は文法的対立を形態統語的に表出するというアイルランド語の手法を引き継いでいることを明らかにした。

・*Have* NP V-*en* に関しては調査を継続している。これまでの考察を“*HAVE + NP + V-en* in Hiberno-English: Meanings of Perfect and Beyond” (*New Perspective on Irish English 6,* 2020) としてまとめ、研究発表を行った。

(2) 接触による言語変化および言語接触環境に関する調査と分析

i. アイルランド英語の文法形成のモデル

アイルランド英語の文法が言語接触の観点からどのように捉えられるのかについて、クレオールなどとの関係も踏まえ、接触による文法形成のモデルを提案した。*’tis*…文を中心に考察した成果の一部は “Contact-induced Grammatical Formation: A Model for Hiberno-English” (*English in*

Contact, 2019) として研究発表を行った。

ii. 言語接触の諸問題

言語接触の基礎論とりわけ話者とコミュニティをめぐる言語環境の関与性の基礎的な論考を、嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄 編『言語接触―英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』（東京大学出版会, 2019 年）にまとめ、公刊した。

iii. アイルランドの言語接触にみる「ことばと社会」

・アイルランド語の保持に取り組む国とコミュニティ、ゲールタハト（アイルランド語使用地域）の人々の言語をめぐる葛藤について、インタビュー、アンケートの記述を紹介しながら解説した（「アイルランドの言語交替と今日的葛藤」共創学会, 2019 年）。

・「コトバの未来」（放送大学講演会, 2018 年）においては、「世界は英語を選択するのか」という標題のもとに、HE 研究とゲールタハトにおける調査で知り得たことがらを日本への視点も含めて一般の方々と共有した。

iv. 言語の中と外

言語の理解には、言語の「中」（すなわち言語体系）を分かることとそれを「外」（言語をとりまく環境）との関係において分かることの両方が必要である。研究発表「言語の中と外―アイルランド英語、言語接触、時間と脳をめぐって」（京都大学言語学懇話会第 109 回例会, 2019 年）の機会に、HE の文法形成、話者のコミュニティ環境などについてこれまでの考察をまとめた。

(3)言語使用と言語意識形成の理論の検証

i.言語意識と言語使用、言語知識の更新に関する仮説

論文“Speakers' awareness and the use of *do be* vs. *be after* in Hiberno-English” (*World Englishes 35*, 310-323 頁, 2016 年)において言語使用における言語意識の作用に関する仮説を提案した。

ii. 言語とアイデンティティに関する批判的検討と調査方法

研究発表“Evaluation of Ethno-linguistic Identity in Post-modern Irish Society” (*IPra 16*, 2019)において、アンケート調査・インタビュー調査における話者の回答の評価に関して批判的考察を行い、さらにポストモダンのアイデンティティ論の参照のもとに「言語とアイデンティティ」を論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 嶋田珠巳	４．巻 39
２．論文標題 'Tis…. Pattern in Hiberno-English as a Grammatical Innovation	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京大学言語学論集　（林徹先生退職記念号）	６．最初と最後の頁 243-263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15083/00074543	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shimada, Tamami	４．巻 19
２．論文標題 A Survey on Language and Identity in an Irish Context (II): Attitudes towards language shift	５．発行年 2017年
３．雑誌名 明海大学大学院応用言語学研究科紀要　応用言語学研究	６．最初と最後の頁 79-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shimada, Tamami	４．巻 35
２．論文標題 Speakers' awareness and the use of do be vs. be after in Hiberno-English	５．発行年 2016年
３．雑誌名 World Englishes	６．最初と最後の頁 310-323
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/weng.12197	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 嶋田珠巳	４．巻 -
２．論文標題 社会言語学の課題ーことばの選択を考える	５．発行年 2017年
３．雑誌名 西山 佑司，杉岡 洋子（編）『ことばの科学ー東京言語研究所開設50周年記念セミナー 』	６．最初と最後の頁 97-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 嶋田珠巳	４．巻 -
２．論文標題 ゲールタハト（アイルランド語使用地域）の小学校にみる今日的葛藤――アイルランドの言語政策とコミュニティ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京大学言語学論集＜別冊2＞学校を通して見る移民コミュニティ	６．最初と最後の頁 101-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Shimada, Tamami
２．発表標題 HAVE + NP + V-en in Hiberno-English: Meanings of Perfect and Beyond
３．学会等名 New Perspectives on Irish English 6 (NPIE 6)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 嶋田珠巳
２．発表標題 アイルランドの言語交替と今日的葛藤
３．学会等名 第７回共創学研究会「多文化共生社会を共創する」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shimada, Tamami
２．発表標題 Evaluation of Ethno-linguistic Identity in Post-modern Irish Society
３．学会等名 International Pragmatics Conference 16 (IPra 16)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 嶋田珠巳
２．発表標題 言語の中と外ーアイルランド英語、言語接触、時間と脳をめぐって
３．学会等名 京都大学言語学懇話会 第109回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shimada, Tamami
２．発表標題 Contact-induced Grammatical Formation: A Model for Hiberno-English
３．学会等名 English in Contact（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 嶋田珠巳
２．発表標題 世界は英語を選択するのか
３．学会等名 放送大学文京学習センター公開講座「コトバの未来」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shimada, Tamami
２．発表標題 Conditions for future language shift? : Japanese inclination towards the English language in school curricula and TV commercials
３．学会等名 22nd Conference of the International Association for World Englishes（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 嶋田珠巳
２．発表標題 社会言語学の課題ーことばの選択を考える
３．学会等名 東京言語研究所開設５０周年記念セミナー（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 嶋田珠巳	４．発行年 2016年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 204
３．書名 英語という選択ーアイルランドの今	

１．著者名 大津由紀雄・嶋田珠巳編	４．発行年 2016年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 160
３．書名 英語の学び方	

１．著者名 嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 340
３．書名 言語接触ー英語化する日本語から考える「言語とはなにか」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考